

茅門杯ゴルフ



「芝刈りに行きませんか」

残暑のほでりを木々を渡る風が和ませているある夕方、我が家を建てた大工の棟梁が、縁側から声をかけた。私は奥にいる夫に

「憲ちゃんが「柴刈」に行こうって」

と伝えた。新しく茶の間についた囲炉裏のための柴かと思つたのだ。鹿児島に来て間もなかつた私は、まだこの辺では桃太郎のおじいさんやカチカチ山の狸の背にある柴が必要なのかと早とちりしたのだ。それはゴルフの誘いだつたから、私の勘違いはその後しばらく酒の席の笑い話となつた。

在京中に夫が「鹿児島でやることはゴルフく

らいのものだ」と言つて、実家の近くのゴルフ場の会員権を買つたという。夫が薦めるのでついでに私もメンバーになつた。

となれば多少の真似事くらいしておかなくては迷惑をかけることになる、三ヶ月ほど中年のレッスンプロについて練習したことがあつた。しかし私は動かしているつもりもないのに「頭が動く」と言つ。今ならビデオで確認して納得も出来たと思つが、私は面倒なものだと、あつさり止めてしまつていた。

大体、長年の五人の子育てとその学費、姑への送金などチマチマと家計をやりくりして来た私には、ただボールを打つて回つてお金を払つたということには、どうも馴染めなかつた。三十代も半ば過ぎてから勤め始めた会社時代、時折課のボーリング大会があつても「勿体ない。昼休みの青空の下でのバレーボールで十分」と内心思つて、ずっとパスしていた私であつた。そ

れがある時参加してみると、皆とワイワイやるのが結構楽しく、仲間との懇親に役立っていることを実感し、これも日本のGNPに役立つているんだと認識を新たにしたのだった。それから夫がこんなにもいそいそと出掛けるからにはゴルフの効用も満更ではなかるうと、出費にめくじらを立てるのは止めにしたのだった。

二回は私も夫と一緒にゴルフに参加したが、いつしか抜けた。夫は高校生時代の仲間と出掛ける他に、大工の憲ちゃん、その友人の賢ちゃんと三人で毎月やるようになり、私はそのあとの一杯の準備をして待っているというのが定番となった。そしてそれぞれの反省や自慢話を聞きながらスコアをフロッピーに記録していた。ある時夫が

「そつだ。茅門杯ゴルフをやるつや。友人や町の人達を大勢呼んで懇親を兼ねて楽しくやりたいな」

と言った。しかしそれが実際に開催されるまでには三年ほどが必要だった。

鹿児島に帰って間もなく、暇つぶしに作った私の月餅風饅頭が入来町の料理コンテストで話題になったことがあった。一三年して、街道沿いに町の「ふれあいの館」が出来た折「そこで売りたいのであの饅頭を作ってほしい」と言われて、夫と本格的に作り始め、売り出したのが平成九年の十月であった。

鎌倉時代に渋谷氏五兄弟が薩摩に地頭の職を得て関東から下向してから七百五十年に当たると言つことで、入来花水木会を結成し、「北薩歴史探報の会」を開催したのは翌平成十年の五月のことだ。

その年の十月、夫は「茅門饅頭発売一周年記念」ということで、念願の「茅門杯ゴルフ大会」を入来城山ゴルフ倶楽部で開催しようと決めたのだ。町でのコンペ開催に何度も携わって

いる町の若い人達に幹事になってもらったおかげで、初めての大会も大過なく開催出来たのだった。

カタログを取り寄せて、大きな優勝杯や取りきりの杯を決めたり、記念品の饅頭の箱にスプーンで色を着けたりなどの準備も楽しかった。まだ嫁ぐ前の娘と一緒に働いたことも今は思い出である。

参加者はMBCの豎山社長、桐野三郎氏、岡田哲也氏などの錚々たる面々や南日本新聞社を始めジャーナリストの方々、町長、商工会長、役場の職員や町の事業家と多方面の方々五十余名に参加であった。初めてのことで不手際も多かったかもしれないが、まずまずの会だったと思っ。

翌十一年は大きなイベント「入来新能」に忙殺され、その後本人のみが大真面目の当落無視の町長選出馬や姑の物故もあって、ゴルフコン

ペの開催どころではなかった。十二年は雨天で流れた新能の後始末で終わった。

昨年秋、姑の三回忌を終えた。この三年間の何やかやで、二人の会員権は手を離れてしまったが、生活必需品でもないので、お互いグチツたこともない。そしてそろそろ第二回のコンペを開催したいと夫が言った時は、幹事たちの都合が悪く、相談の結果、翌春の十四年四月十四日と決められたのだ。

前年に、この頃ならば一応集まり易いのではと決めた開催日だったが、実際は人事異動の直後の歓送迎会の最中であった。お忙しい方々には行事の重なる時期で、おまけに早慶ゴルフコンペとも重なっていた。それでもそちらを断って参加して下さった。昨今話題のテレビ番組

「南の疾風・隼人」のプロデューサーKKBの百田陽一重役と桐野三郎氏には本当に感謝する。桐野さんはファンの多いペンシルクラブとも重

なつていて、それをさておいてのご参加ということで、私は会員の友人達の見えない視線に頭を下げて小さくなつてゐる。

入来町長 新任の南日本新聞川内支社長上村氏、九月に新能を共催する川内市まちづくり公社の前平事務局長のご参加もあつた。

時はまさに大不景気である。若い人達も何かいま一つ元気がない。こんな時こそエイツと暗いムードをかつ飛ばし、カンラカラカラと哄笑でもすれば、時化た貧乏神も退散するのではなからうか。この際だからこそ大いに明るく振る舞つて、よい運気を呼び込もつというのが主催者のもくろみでもある。

行い善い者たちのすることはやはり違ふ。当日は前日までの雨模様の天候はすっかり回復していた。朝のうちはやや寒かったが、日中は程よく暖かく、しかも薄曇りで日焼けも免れるという絶好のゴルフ日和となつた。

私は受付で、一人一人に手製の拙い記念品

「茅門饅頭」を手渡す。顔見知りのメンバーも日頃見慣れぬゴルフウェアで現れると、また違った一面を見るよつで楽しい。八時半から第一組のスタート。IN・OUT合わせて九組、三十五名がお集まりであつた。

入来峠を見下ろす八重山の頂上を切り開いて造成されたこのゴルフ場は、そのなだらかな起伏も遠景も姿よく、新緑も清々しい景色がまさに絵のように美しく広がっている。

プレーが始まつて、プレーヤーは次々と薄緑の芝の中を遠くへ移動して行く。遠くに動いている人々は、テラスから目を凝らしても、ウェアを記憶してはいないかぎり誰とも見分けがつかない。上がりは三時頃というので、一先ず私は家に帰つて一休みである。

戻つて暫くして、どうやら茅門杯グループの第一陣が上がりのホールに向かつてゐるよつだ。

私は安全を期して木陰に身を隠し、上がりのホールのグリーンに集まった人々を遠くからカメラに収めた。INもOUTも同じ頃に出たので右のホール、左のホールと忙しい。天気が上々だったこともあり、それぞれ喜色を浮かべて楽しみに語り合いながら上がって来る。

パーティが始まった。主催者と三名の代表の挨拶の後、いよいよ表彰である。幹事が豊富に賞品を用意していて、半数の方がなんらかの賞品をもらえる筈であった。スコアの計算にはいろいろな仕掛けがあるのか優勝者は実力者とは限らないらしい。前回の優勝者はベスグロ賞ということ、今回の大きな優勝杯は若い建設会社の社長さんだった。授与の瞬間はリプレイしてもらってパチリ。

町長はブービー賞、夫はいつも通り抜群の成績で敢闘賞である。ファミリーマート重役の榊氏寄贈の銘柄焼酎はKKBのOBの升金氏に。

ゴルフ倶楽部沖牟田支配人よりのダンロップのゴルフバッグは宮田自動車社長で、それぞれお喜びだった。田島組社長は流石の実力で、ニアピン賞、ドラコン賞の二つもの賞を獲得なさった。

憲ちゃんの運転する帰りの車の中で、敢闘賞の重い箱を開けてみた。いろいろな調味料の詰合せで、家庭の主婦にはいくらあっても有り難いものだった。運悪く何も当たらなかった憲ちゃんにお裾分けする。

こうして又思い出の二頁が作られた。どのくらいこうした楽しい思い出を作り得たか、そこに居合わせられたかが、人生の豊かさの量りになるのだと思う。

次回は今回ご都合の悪かった方や新しい方々にも参加して頂いて、一回り大きな会にしたいものである。ゴルフのお好きな方、どうぞ今から手を上げてご参加ください。